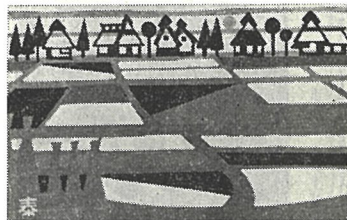


随 想



声の墓標を

安 永 武 人

戦後も三十年ちかくたちましたが、わたしたち戦中世代には、戦後社会の急激な変化や記念すべき事件よりも、まだ戦時中の事態やそれにまつわる情念のほうが、おもくくるしく切実によりみがえってくるという傾きがあるようです。ひとつには旧制静岡高

校の戦没者遺稿集《地のさざめごと》（講談社）のような出版があいつぎ、それらを身につまされてよむことが、たびかさなっているせいかもしれません。《きけわだつみのこえ》（東大出版）は著名ですが、白鷺遺族会《雲ながるる果てに》（河出）、和田稔《わだつみのこえ消えることなく》（筑摩）、宅島徳光《遺稿・くちなしの花》（大光社）、林尹夫《わがいのち月明に燃ゆ》（筑摩）など、かれらのすさまじい内面のたたかいは、読者にいまいまだあの時代にたちもどって考えることをもとめているといえましよう。これらの手記・書簡・日記・詩・短歌・俳句は、史家によって現代史叙述のなかくみこまれることはめつたにありませんが、時代の生きた証言であることはたしかです。し、そのくるおしい内心の軌跡は、こんにちもなおわたしたちをとらえてはなさないものがあります。こういう記録が、肉親だけのおもいで草として、まだ数おおくもれているのではないのでしょうか。

戦時下の同志社の若者たちはどうであったのか——同志社関係者の当時の記録を戦没・存命をとわず蒐集して、創立百周年の

記念に出版してもらえないものだろうか、という願いをひそかにいだいています。もう十年もたてば、それらの記録は湮滅してしまうでしょうから。

一九四三（昭和十八）年の学徒出陣にあたって、今井登志喜教授は「前途ある若き諸君を、今痛恨の思いをもって戦場に送る。今回の政府の措置はまさに千載の痛恨事とせねばならぬ。願わくは諸君、命を大切に、生きて再びこの教室に会せんことを」、また辰野隆教授は「諸君、生きて帰れ、戦争の帰結は問うまい、ただ生きて帰れ」（東大十八史会《学徒出陣の記録》中公新書）ということばで最終講義を結んだという一節をよんだときの、戦慄にいた感動を忘れることができません。わたしには、そういう生きるささえとなることばとのであいがなかったからです。それにつけても同志社ではどうだったのだろうか、というおもいかられます。「死者は死者をして葬らしめよ」というのもひとつの考えかたでしょう。しかし、あの時代の若者たちの声に耳をかたむけることは、こんにちの同志社にとって、無意味であるとおもえませんか。靖国

神社法案に代表される一連の反動化にたいして、わたしたちのたたかひの足場をかためるためにも、あの時代の同志社に学んだ若者たちの生死をかけた声を、じかに聞きたいと切におもいます。（七四・四・二五）

（大学文学部教授・日本現代文学）

豊かな社会と若者

村 上 正 毅

「マーメイド三世」、ちっぽけな、とても世界一周を果たしたヨットとは思えなかった。故郷の風を帆にいっぱいはいらんでゴールへ。母親と仲間に囲まれ、妻も待っている。最後のダッシュは幸せに包まれていた。「天運があったと思う。これ以上の幸福を望むのは神を冒瀆することになる。天の摂理を感じました」。

孤独を克服し、無寄港世界一周という大事業を成就させたのはただ一つ、堀江青年

の男としての不滅のロマンチズムではないであろうか。何らかの形で創造的に生きようとする人間は無寄港世界一周達成という一つの作品を完成するまで自らの理想を自らの手で現実化するという男らしさ、真のバイオニア精神を堀江健一青年にみた。現代をして乱世とか変革・激動の七十年代とよくいわれる。それはもうれつに技術革新を押し進め、進歩＝幸福を信じてきた人間が人間不在の進歩であったことに気づき、これまでと同じ形態での技術革新や進歩では、人間の未来について、終末的危機意識を抱きはじめていることのあらわれである。確かに周囲を見まわすと、大資本家の買収占め、悪性インフレ、過激派による暴力、殺人等、まったく「どこをみてもまっ暗闇じゃございせんか」。このような暮らしていく社会を築いた大人また権力者に責任をなすりつけるのはたやすい。しかし、青年はそれを事実として放置していいものであろうか。

青年の特権に、若さとロマンチズム、柔軟な思考力、チャレンジの三つをあげた。これらの要素のない青年は、青年の名

に値しないであろう。そして今、わたしが主張したいのは、こうした三つの特質を創造的に生かしエネルギーを結集し、連帯して明日の社会に貢献していくことこそ大切であるという点である。例えば、ソ連の作家ソルジュニーツィンは、「若者たちよ正義のためにウソを拒め」と逆境の立場から勇気をもってアピールした。それも一つの社会悪への勇気ある価値的行動だと思う。一体「豊かさ」とは何なのか？ 現代の豊かさは大半は物質的豊かさが人生の目的であり、それが他人との人生勝利を意味している。そしてある種の若者はそれを信じ、その目的のために人を裏切り自分自身をも売ることさえある。しかしその豊かさはうそだ。若者をそのように慣らした方が権力者には都合がよいというだけなのだ。うそを拒もう。「何のための豊かさ」かが問題であろう。

言いかえれば、人間の心の生命的発動によって充足感を得、かつ社会に貢献していき人間主体の文化を創り出すことが真の豊かな社会ではないだろうか。そういった意味での真の人間共和社会を創るために今こ

そ青年は価値的行動を展開し、種々の社会
悪に毒されることなく正しい哲学をもつこ
とが今必要なのではないか。つまり人間内
部の生命的変革こそ現代に最も必要とされ
るものだとなしは信じる。それは一言で
いえば、人間の生命を解き明かした哲学に
よってこそ可能ではなからうか。

私は昨夏、フランスのパリ大学に語学留
学し、国際都市やカルテラタンで各国の
若者たちと語り合った。多くの見識ある若
者は西洋文明による恩恵、豊かさに絶望あ
るいは拒否を示し、人間として真の豊かさ
を得るべく歩き出していた。しかも彼らの
多くはそれを東洋哲学に求めようとしてい
る。私は思う。堀江青年のあの海への前む
きの情熱のように生命的大ロマンにより青
年はこの社会を明かるくすべく波動と遠征
を続けることが今肝要であろう。若者主体
のニュークリエイトカルチャ、それが発
想の転換であり、それに呼応する青年たち
により新しい地域文化を図ることはどうで
あろうか。そして若者と旧世代とのブリッ
ジの役割を果たし、家庭―職場―地域―京
都―日本―世界―宇宙という大きな視野の

元にたつて、一人一人の意識変革を図るこ
とが肝要である。

そしてそれは何のための変革か？ 私
は思う。人間共和の社会を創るための生命的
変革だと、そして青年がその実証を自分の
地域、会社、家庭と社会とに示していくこ
とこそ与えられた重要な課題ではないであ
らうか。

(本部職員)



同志社時報 第51号

座談会 《同志社におけるキリスト教主義教育》

岡 満男・有賀のゆり・鎌谷 襄

中村 幸久・山本 文雄・オーテス・ケーリ

(司会) 遠藤 彰

論文 『藩論』研究——いわゆる千頭論文『ジャパン・クロニクル』

掲載の翻訳……………関家 新助

えと文・随想・新刊紹介

1部100円・年3回発行